

とうきょうすくわくプログラム活動報告書

令和7年6月

妙福寺保育園 さくら組（4歳）

1. 活動のテーマ 「木」

4月は花、5月は葉っぱをテーマに活動してきた。花が咲いていた木がやがて花を散らし葉っぱへと移り変わっていく様子に目を向けることで、花と葉っぱ、そして木とのつながりや関連性に気づいて欲しい思い、このテーマを設定した。

2. 活動スケジュール

令和7年5月から6月までの2ヶ月間

5月第3週 境内散策

5月第4週 葉っぱのフロタージュ 動物作り

5月第5週 境内散策 種を探し植えよう

6月第1週 木と友達になろう 葉っぱの背比べ

6月第2週 葉っぱの形遊び 葉っぱの上で雲遊び

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

テーマは「木」としているが、5月から取り組んでいる「葉っぱ」への興味や関心が深まっているため、木の中でも葉っぱに着目しながら活動を展開していった。

〈用意したもの〉

袋、半紙、のり、紙皿、クレヨン、テープ、スポイト、障子紙

4. 探究活動の実践

葉っぱを探しに境内散策に行った。様々な葉っぱや木を見比べられるよう、ゆっくり進みながら観察できるようにした。また気に入った葉っぱは持ち帰れるよう袋を渡した。葉っぱのコラージュや制作活動では、葉の色や形・大きさの違いに気づけるように取り組んだ。葉っぱについての様々な気付きや発見が生まれ、興味がさらに高まっている様子が見られた。

後日再び境内散策に行った。たんぽぽが多く咲いている時期であったため、種にも着目したいと考え、絵本「たんぽぽ」を読んだ。その後、子どもたちとたんぽぽ探しに行った。見つけた綿毛を園に持ち帰り、まずは綿毛の観察を行なった。そして、保育室前の花壇にそれぞれ綿毛の種を植えた。

園庭にある木を2つのグループに分かれて観察し、「木と友達になろう」というテーマの

もと、木の名前を呼んだり実際に触れたりしながら、身近にある木をより近くに感じられるようにした。お気に入りの木の葉っぱを保育室に持ち帰り、葉っぱの背比べも行った。様々な活動を重ねるなかで遊びや興味関心が深まってきたと感じ、木をテーマにしながらも、葉っぱにより焦点を当てて活動を進めた。画用紙に○・△・□を描き、それぞれの形に似た葉っぱを探して貼る活動も行った。またスポイトを使って葉っぱの上に雫を垂らしたり、色水を垂らしたりする遊びも取り入れ、葉の表と裏の違いにも着目できるようにした。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

境内散策では様々な葉の形に着目しながら散策を行った。「ギザギザしてる」「ハートの形みたい」など、葉の違いに気付き発言する姿が見られた。中には「恐竜の足跡みたい」とイメージを膨らませる子もいた。また、葉に触れるなかで、形だけでなく感触にも関心が向くようになり「ツルツルしてる」「こっちはカサカサしているね」などと友達同士で伝え合う姿が見られた。「こっちの葉っぱ見て」「これは小さい葉っぱだよ」と、発見したことを共有し合う姿もあり、興味関心の広がりを感じられた。

散策中、「黄緑の葉っぱは柔らかい」「緑の葉っぱは硬い」と、色と感触を結びつけて気付く姿もあった。昨年度取り組んだ「光」の活動を思い出し、黄色い葉っぱを太陽にかざして「透き通っている」「綺麗だね」と話す姿も見られた。さらに木についている葉っぱに太陽の光が当たっていることに気が付き「光ってる」と発見する子もいた。光が当たるように葉の角度を変えながら試す姿も見られ、主体的に探求する様子が伺えた。

「木と友達になろう」の活動では「エノキさん」「コブシさん」などと親しみを込めて名前を呼ぶ姿が見られた。「あっちにもあるよ」「次はこっちの木を見に行こう」と子ども同士で声を掛け合いながら活動を進める姿もあり、主体性が育まれていることを感じた。形遊びでは枝の断面を見て「丸いね」と気付いたり、葉を三角や資格に見立てたりするなど様々な視点から遊び込む姿が見られた。葉っぱの雫遊びでは、表面では水が流れやすく垂れてしまうこと、裏面では多くの雫をためる事ができることに気付き、違いを確かめながら試す姿が見られた。







5. 振り返り

日々の遊びのなかで自然に葉を使って遊んだり、園庭のどこにどの木があるかを把握していたりする子が多いことに改めて気付いた。木の名前を知らなくても「この葉っぱはあの木だよ」と理解している姿から、子どもたちが日常の中で身近な自然と関わりを深めていることが分かった。

今回の「木と友達になろう」という活動で改めて木の名前を知る機会を設けたことで、すでに持っている経験と新たな知識が結び付き、理解がより一層深まったと感じた。また、2つのグループに分かれて散策や葉っぱの背比べを行ったことで、それぞれの子どもがどのようなテーマに興味を示しているのか、関心が今どこに向いているのかをより具体的に把握することができた。少人数での活動では一人ひとりの気づきや変化を丁寧に捉えることにつながることを実感した。